

沖代地区条里跡 41次調査

中津市文化財調査報告 第78集

沖代地区条里跡
41次調査
―集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

中津市文化財調査報告
第78集

2017
中津市教育委員会

2017
中津市教育委員会

例 言

- 一、本書は中津市教育委員会が平成26年度に実施した沖代地区条里跡の発掘調査報告である。
- 一、調査は集合住宅建設に伴うもので、調査に要した費用は田村正夫氏の協力を得た。報告書に要した費用は田村美智子氏の協力を得た。
記して感謝申し上げる。
- 一、調査体制は以下のとおりである。

平成26年度（調査）

調査主体	中津市教育委員会
調査責任者	廣畑 功（中津市教育委員会 教育長）
調査事務	今津 時昭（同 文化財課 課長）
	高崎 章子（同 文化財課 文化財係長）
	宇野 眞理（同 管理係長）
	河野さくら（同 管理係）
調査担当	丸山 利枝（同 文化財係）

平成28年度（報告書）

調査主体	中津市教育委員会
調査責任者	廣畑 功（中津市教育委員会 教育長）
調査事務	高尾 良香（同 社会教育課 課長）
	高崎 章子（同 文化財室 室長）
	花崎 徹（同 文化財室 文化財係主幹）
	大森 建（同 管理・文化振興係主幹）
	長尾 淳平（同 管理・文化振興係）
調査担当	丸山 利枝（同 文化財室 文化財係）

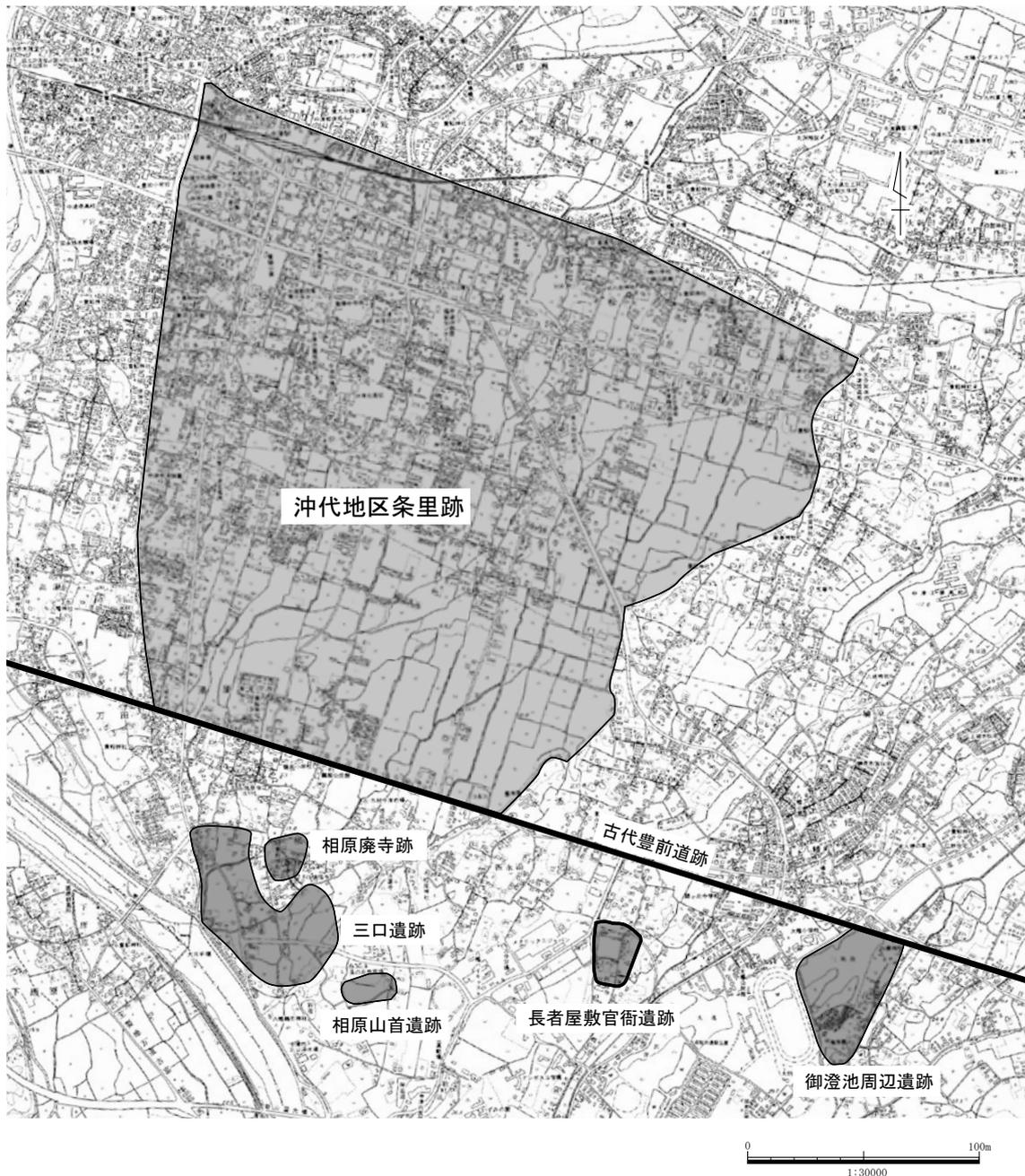
- 一、現場の遺構実測、写真撮影、本書の編集、執筆は丸山が行った。
- 一、発掘作業は下記の皆さんの協力による。
猪迫孝利、祐成本文、中坂真基子、福成誠一

目 次

第1章 地理と歴史的環境	2
第2章 調 査	3
1. 調査に至る経緯	3
2. 調査成果	4
3. まとめ	7

第1章 地理と歴史的環境

遺跡は、山国川によって形成された鶴市神社の崖下を頂部とする扇状地上に位置し、扇央、扇端部分が広く遺跡範囲となっている。遺跡の表面に条里区画が残る。条里は遺跡の南を限る古代豊前道跡（現在の万田四日市線）を基線として区画されたと考えられている。発掘調査では、弥生時代中期～近世の水田、集落跡が見つかるが表面条里に重複する溝、畦畔といった区画施設は確認されていない。44次にわたる発掘調査では、広大な遺跡範囲内に微地形が存在することが分かっている。微高地上では、古墳時代、古代の住居が見つかる。古代の人々が比較的高い土地に住みながら、近くの低地を開発していった様子が明らかになりつつある。また遺跡周辺には、古代下毛郡家正倉跡である長者屋敷官衙遺跡、古代寺院相原廃寺跡など古代の遺跡が集中しており、古代下毛郡の開発を考える上で重要な地域となっている。

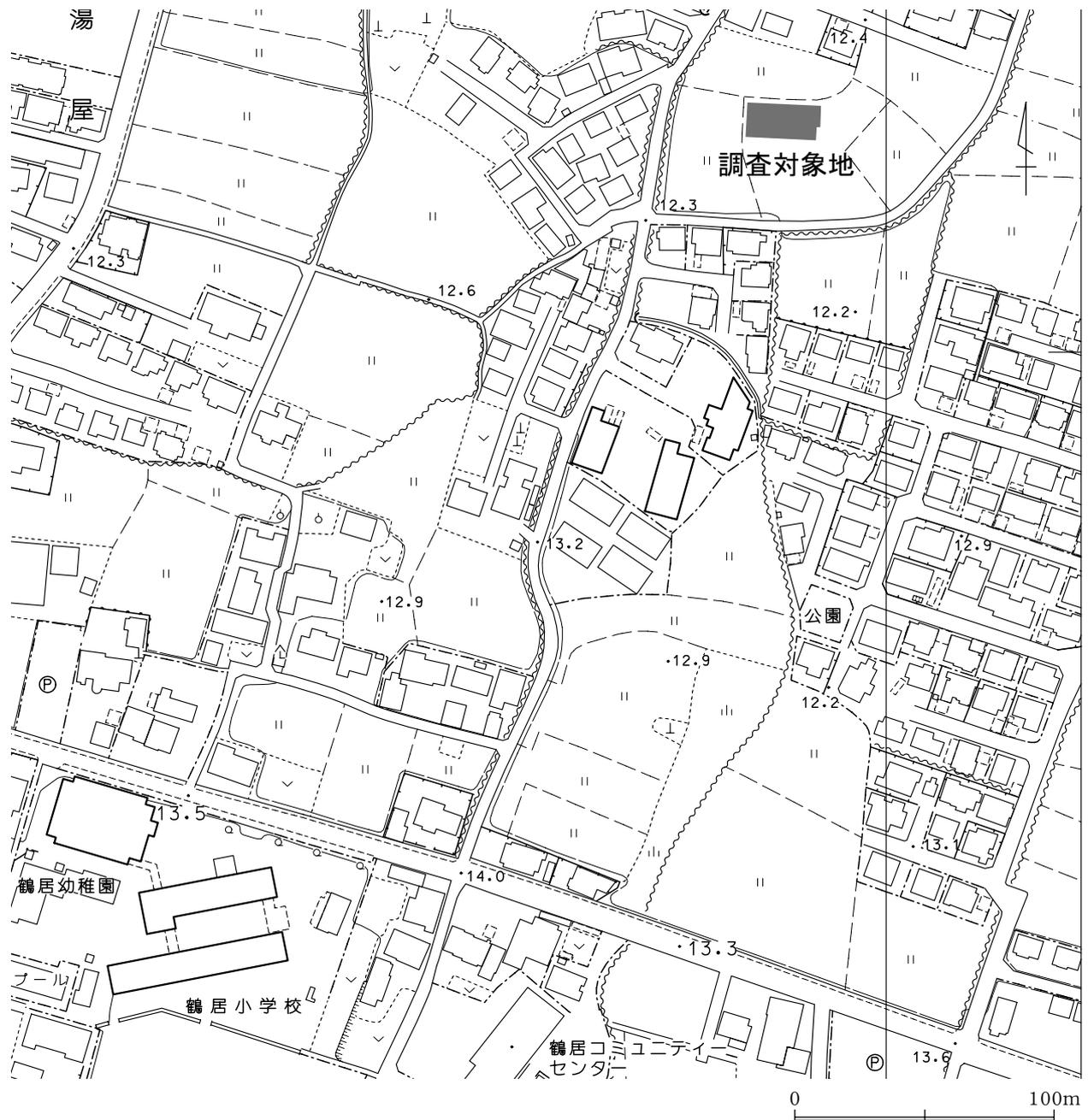


第1図 沖代地区条里跡と周辺の古代遺跡 (S = 1/30,000)

第2章 調査

1. 調査に至る経緯

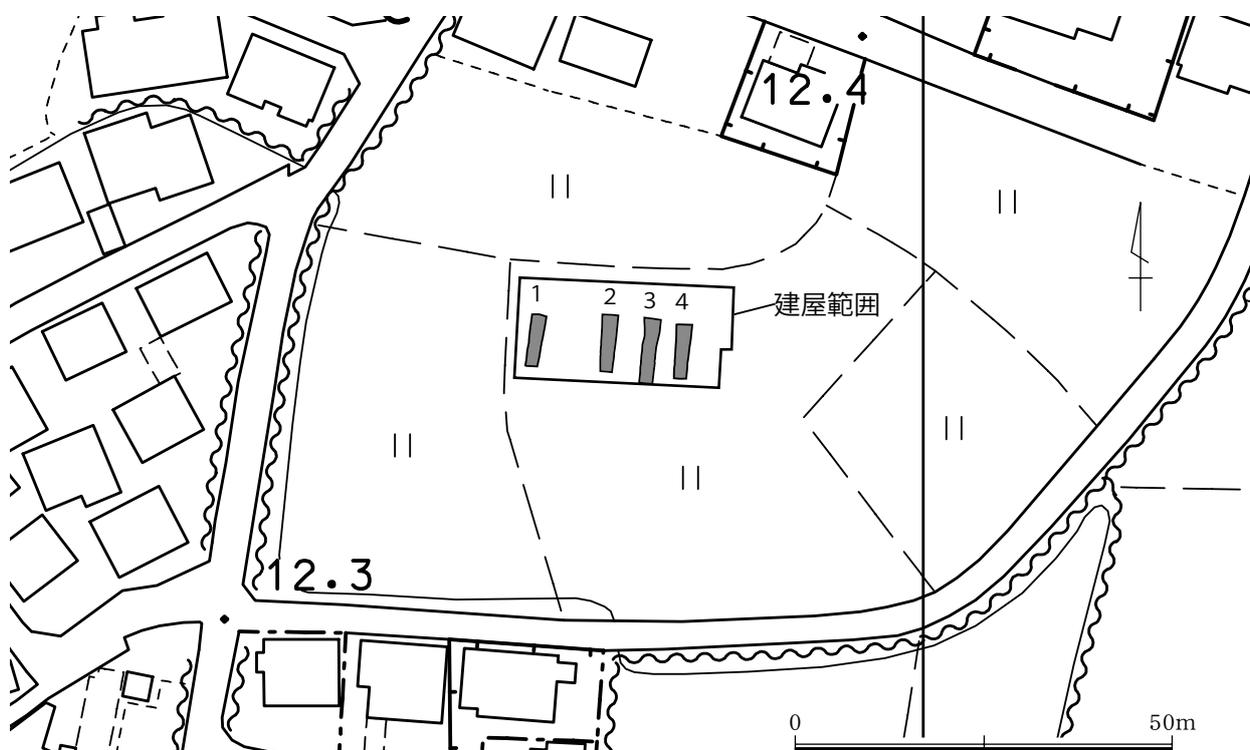
近年、沖代平野は宅地開発が盛んな土地となっている。平成26年10月14日、田村正夫氏から文化財保護法第93条第1項の届出が提出された。同年10月20日、大分県教育委員会教育長より発掘調査の通知があり、同年11月11日に中津市教育委員会が確認調査を行った。調査の結果、古墳時代～古代と考えられる溝を検出したため、本発掘調査が必要と判断した。同年11月14日、田村氏と中津市長との間に埋蔵文化財発掘調査委託契約が交わされ、中津市教育委員会が調査を行った。調査期間は、同年11月20～22日の3日間であった。



第2図 発掘調査位置図 (S=1/2,500)

2. 調査成果 (第3～7図)

確認調査で調査対象となる水田には南北方向に暗渠排水が通っていることが分かった。また溝状遺構の調査ということもあり、暗渠排水を避ける位置に4本のトレンチを設定して調査を行った。



第3図 トレンチ位置図 (S=1/1,000)

1～4トレンチで溝状遺構を確認し発掘した。溝の南北で約40cmの比高差があり、北側が高い。地山は北側で黄褐色シルト、南側で灰白色シルトとなっている。

層序は、現代の水田層の下に水平に堆積する層を6枚確認している。①、②層は灰褐色粘土の堆積で陶器、染付破片を含むことから近世の水田である可能性を考えている。その下の③層は溝の最終堆積で南に水平に堆積している。摩滅した土師器の破片を含む。④層も溝の堆積で、南に水平に堆積している。摩滅した土師器の破片を含む。⑤、⑤'層は今回確認した中で一番古い水田の堆積と考えられる。溝の南側に堆積する。⑨層は溝の南に堆積し、断面の形状から畦畔と考えた。

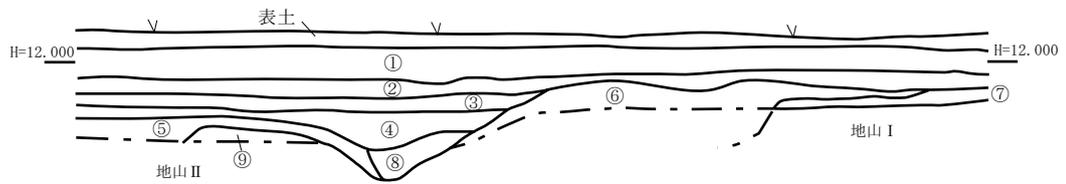
1、2トレンチで確認した溝の北側に堆積する⑥、⑪、⑫、⑬は溝を掘削する以前の掘り込みか、自然の落ち込みと考えられるが、湧水で完掘することができなかった。



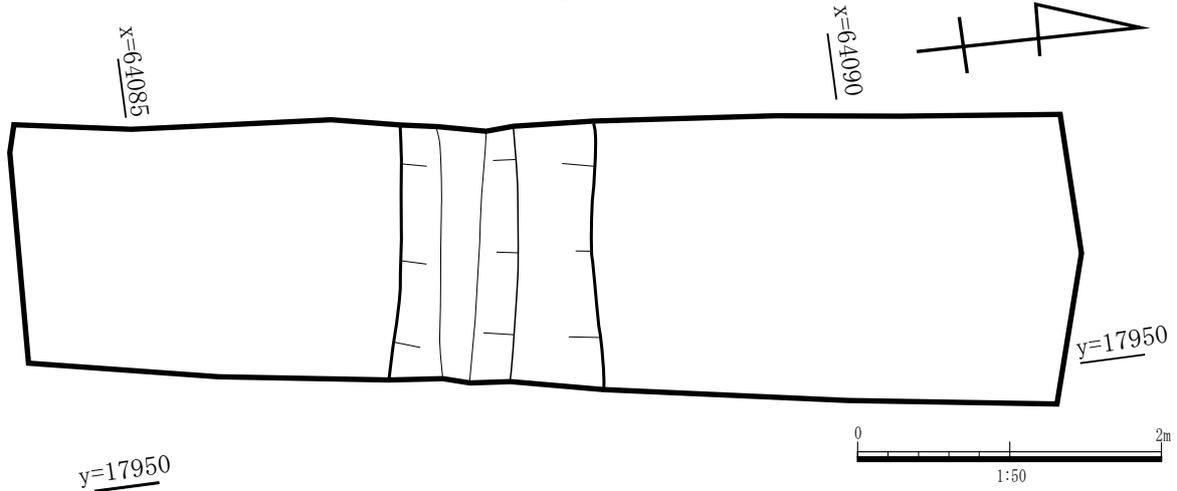
写真1 1トレンチ溝状遺構堆積状況



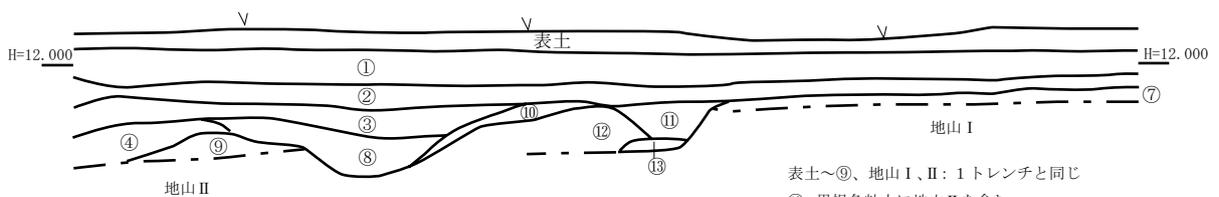
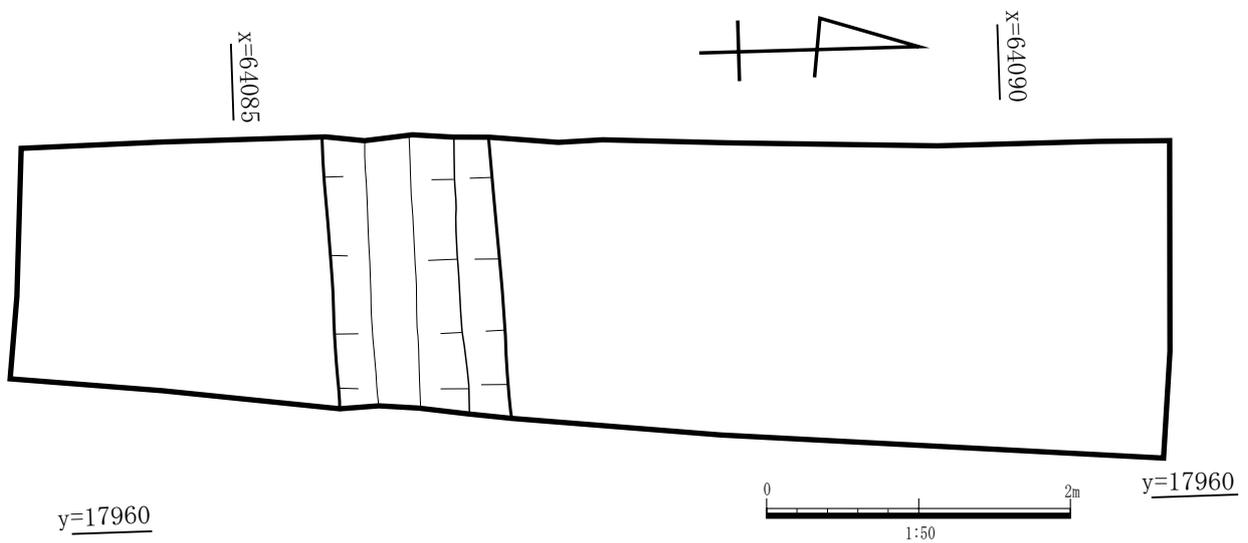
写真2 2トレンチ溝状遺構堆積状況



- 表土：現代の水田層
 ①・②：近世～中世の水田層、陶器・染付破片出土
 ③：黒褐色粘土
 ④：暗褐色粘土
 ⑤：黒褐色粘土に地山Ⅱの大きなブロックを含む
 ⑥：黒褐色シルトに地山Ⅰのブロックを含む
 ⑦：黒褐色シルトに地山Ⅰの大きなブロックを含む
 ⑧：暗褐色粘土
 ⑨：地山Ⅱに⑧を含む
- 地山Ⅰ：黄褐色シルト
 地山Ⅱ：灰白色粘土

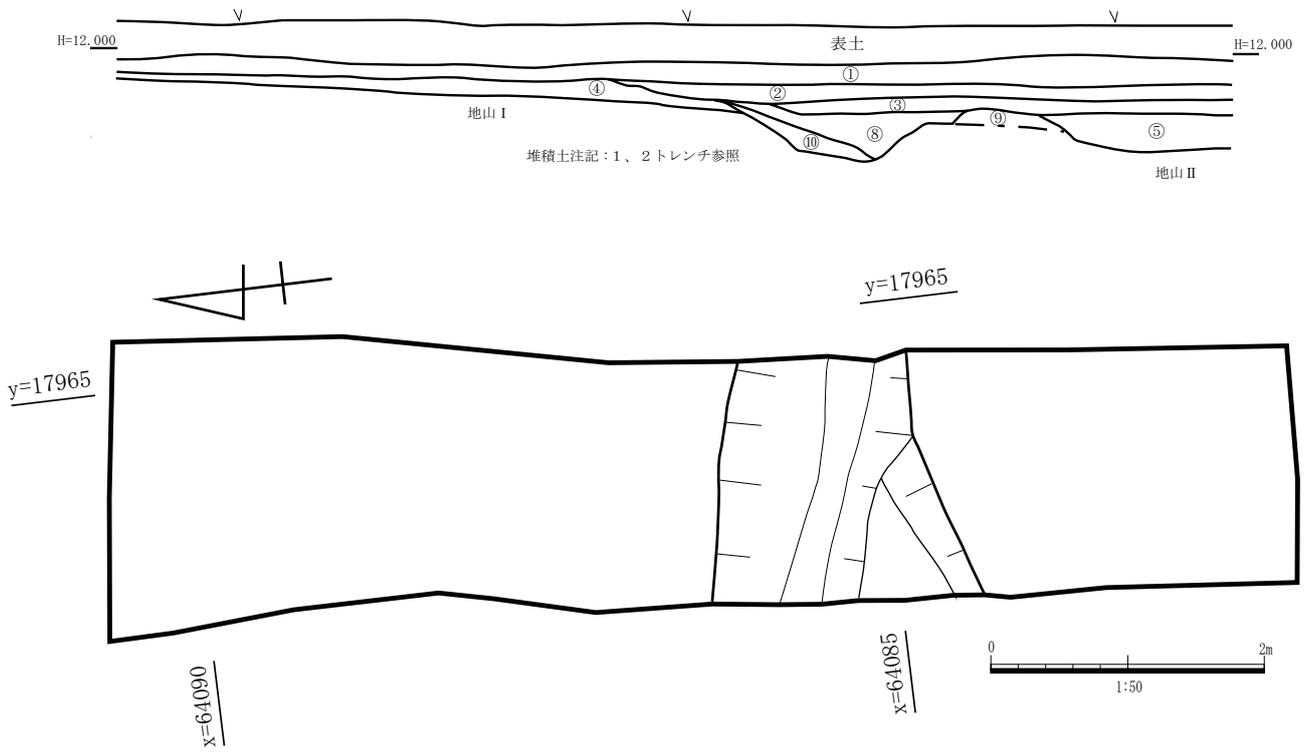


第4図 1 トレンチ西壁堆積状況図、平面図 (S=1/50)

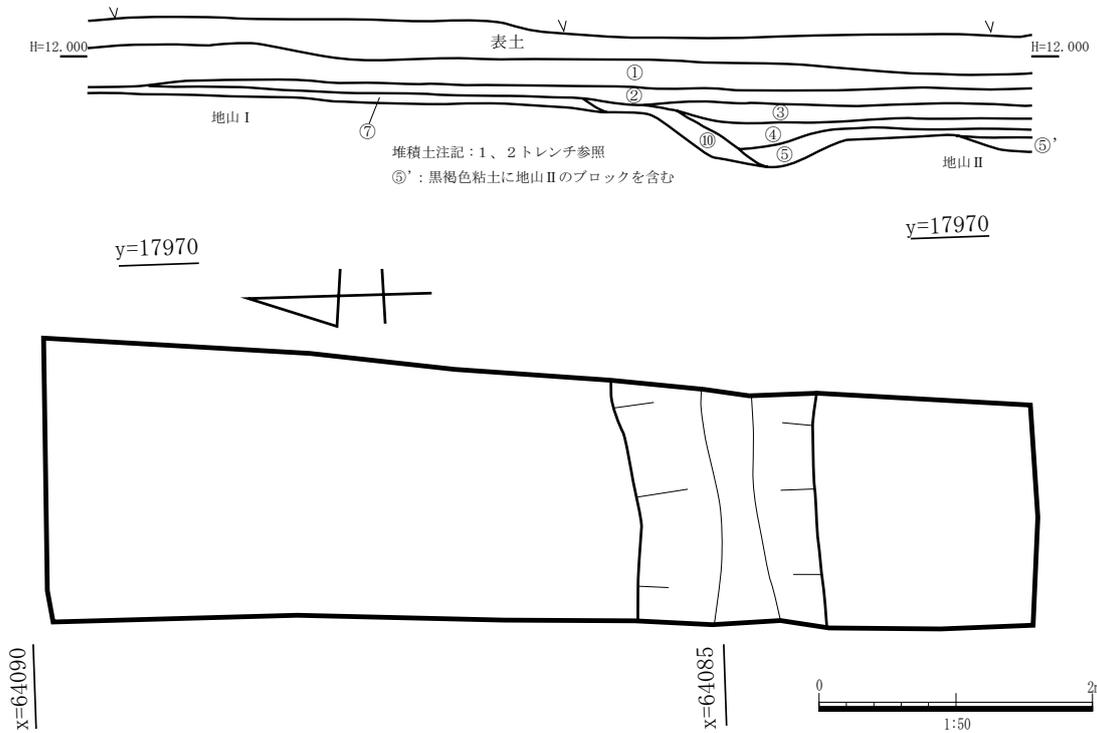


- 表土～⑨、地山Ⅰ、Ⅱ：1 トレンチと同じ
 ⑩：黒褐色粘土に地山Ⅱを含む
 ⑪：黒褐色シルト
 ⑫：灰白色粘土、鉄分多い
 ⑬：暗褐色粘土

第5図 2 トレンチ東壁堆積状況図、平面図 (S=1/50)



第6図 3トレンチ東壁堆積状況図、平面図 (S=1/50)



第7図 4トレンチ東壁堆積状況図、平面図 (S=1/50)

3. まとめ

今回の調査では、表土（現代の耕作土）の下から、6枚の水田堆積層と溝状遺構を確認した。各堆積の時期について詳細は不明である。溝状遺構の掘削時期についても、明確な遺物が出土しなかったため不明である。第8図は、今回確認した溝状遺構と表面条里の坪区画を重ねたものである。第1章でもふれたように、沖代平野の条里区画は古代豊前道を基線として区画されたと考えられており、それに従うと今回確認された溝状遺構は、少なくとも坪の区画溝とは言えないようである。遺跡内の過去の調査では弥生、古墳時代の溝が数箇所確認されているが、今回の溝状遺構も古代以前に遡る可能性がある。また、溝を挟んだ南北で地山の標高に約40cm程度の差があり、開田の際に地形の変換点に掘削されたものであると考えている。



第8図 条里区画と溝状遺構 (S=1/10,000)

